

# 内科・糖尿病内科 担当医師 井口昭久教授の記事が掲載されました。

( 名大医学部学友時報 第733号 2011年2月22日発行 )

人生  
山あり谷あり

## 第4回 「消せないインク」

名古屋大学名誉教授  
愛知淑徳大学教授

いぐち あきひさ  
井口 昭久

記憶に関する学問は医学ではなくて心理学の分野で発展してきた。

記憶が専門の心理学者の書いた本によると、青春時代の記憶は40歳の時に思い出すよりも老年になってから思い出した方がより鮮やかであるそうである。

私は大学病院で研修をやった。昭和40年代の後半であったので、今のような研修医制度はなかった。医学部教授会では大学に残って研修をしている医者数さえ把握していなかった。研修医が各々、自分で医局へお願いして医局を回った。

大学では給料を出してくれなかったもので、私は港に近い病院で外来のアルバイトをして生活をしていました。買ったばかりのパブリカという小さな車で1時間かけて通った。冬、寒い朝にはエンジンがかからなかった。その日もエンジンが始動するのに時間がかかった。病院の外来に遅れそうになって、焦っていた。病院の近くで、横断歩道を人が歩いて来るのが分っていたが、停止せずに走った。密かに見張っていたパトカーがサイレンを鳴らして追いかけてきた。医者的心得として、患者を待たせてはいけないことは知っていた。それで交通違反を犯してしまったことを、だから遅くなることを患者たちに知らせなくてはいけないと思い、逃げた。パトカーは追ってきた。スピーカーで「止まれ、とまれ!」と言った。こういう記憶は冒頭の本によると、聴覚記憶であるようだ。

病院の駐車場で結局、お巡りさん二人に捕まった。待っている患者たちに「少し遅れます」と言いたかった。外来へ行

かせて下さいと若いお巡りさんに頼んだが、「何を言っているんだ!」と取り合ってくれなかった。

悪質であるということで、パトカーに乗せられて警察署へ連行されて、事情聴取をされることになった。お巡りさんは訊いた。「職業は何だ?」私は「え?」と思った。外来へ行かせて呉れと言ったのだから、私が医者であることは分っていると思っていた。「医者です」と答えると、「どこの?」と聞くのでサッキ捕まった病院で働いています、と言うと急に態度が変わった。

警察官は小さな声で「患者だと思った」と言って「ちょっと待っていてください。署長を呼んできます」と、署長を呼んできた。署長は「病院にはお世話になっていますので今日のところは目をつむっておきますが、医者でも違反はしてはいけませんよ」と言って釈放してくれた。

その病院のある日の外来で、患者が封筒を差し出した。患者から金を受け取ってはいけないことを私は知っていた。私は固辞したが、患者は困惑した表情で、その封筒を机の上に置いて行った。患者が帰った後、そっとその薄い封筒を覗いて開けた。封筒には私が書きこまなければならない患者の生命保険の証明書が入っていた。こういう記憶は視覚記憶であるようだ。

記憶はいくつかの謎めいた法則に従っている。思い出すと心が痛むようなことや、恥ずかしい出来事は、警察の調書のように事細かにはっきりと、消せないインクで記録されているようである。